



「変貌する国際情勢と日本の外交」

外務事務次官 齋木 昭隆 氏

(平成28年1月18日 於日本記者クラブ)



(講演要旨)

皆様、齋木でございます。年の初めには毎年、この日本外交協会の場でその年の外交の大きな課題、見通しについてお話をさせていただくことになっております。

世の中、様々なことが次から次へと起きております。ちょうど2015年の1月の初めは、フランスで先鋭な政治風刺画で有名な出版社が襲撃されました。IS(イスラム国)という中東を発祥とする過激派テロ集団の仕業であるとの犯行声明が発出されたことは記憶に新しいところです。その同じISが昨年11月13日にはパリで同時多発的に無差別テロ事件を起こしました。このISという中東発の暴力集団であるテロ組織と国際社会がどう向き合うのかは、我々にとっての最大の課題と思っています。それ以外にも、様々な国際情勢の不安定要因、リスク要因があります。今、我々は非常に不安定な時代、歴史の転換点と言ってもいい時代に差し掛かっている気がします。

一つは、ISもそうですが、様々なグループや国が主張を強め、具体的な行動を起こすことを通じて、戦後70年の中で形成されてきた国際秩序が今大きな節目を迎えており、その秩序の様々な部分が崩れ落ちつつあるような気がしています。

慰安婦問題の日韓合意は戦後70年の象徴的成果

昨年は戦後70年。日本という国の70年間の歩みを世界にどう語るのか、特に8月の総理大臣談話が国際社会、特に近隣の国々から大いに注目された年でした。その年を幸いにも我々はうまく乗り切れ

たと思っています。年末のいわゆる慰安婦問題についての日韓合意は外務大臣が韓国を訪問し、共同記者会見で最終的な合意である、しかも、不可逆的な、つまり後戻りをお互いにしないし、できない合意である、これでもうピリオドだということを世界に向かって二人並んで宣言したわけです。その後のそれぞれが行わなければいけないことについては、まだ年が改まって2週間程度でございますから、そう簡単にすべてがトントン拍子にいくわけではないということは我々も織り込んでいます。ただ、本来やらなければいけないことはたくさんあります。そのようなときに、不用意な発言や不用意な行動により、世論との関係でお互いが困るような状況をつくらないし、相手を刺激しない。これに両国が合意したのです。年末の最後に日韓が握手したことは戦後70年の時代の節目を締めくくる上で、象徴的ないい成果だと思っています。

翻って今年です。国際情勢の中で我々が直面しているリスク、不安定要因について今から順不同に7つほど申し上げようと思います。

我々が直面する7つのリスク…第一は北朝鮮

一つは今年またもや世界に対して挑発行動をした北朝鮮です。度重なる核実験やミサイル発射の挑発に対して今、国連の安全保障理事会(安保理)で北朝鮮に対する制裁をどれだけ厳しいものにしようかと相談している真っ最中です。日本も幸い今年、安保理メンバーです。アメリカ、日本そして今年メンバーではありませんが直接の脅威を感じている韓国の考え方を中心に決議内容、つまり制裁をどこま